

3. 5. 2. 動作の主体をとらない構文

格助詞「が」をとる名詞が、動作の主体でないときがある。

- (45) 頭髪が 額を おおう。
- (46) 木が 山道をおおう。
- (47) 深い雪が 盆地をおおう。
- (48) 熱気が 会場をおおう。

これらの例文で「かぶせる」を用いることはできない。「頭髪」「深い雪」「熱気」は、格助詞「が」をとってはいるが、動作の主体ではない。そこで次のように仮定してみよう。

「おおう」は、動作の主体をとらない構文で、着装するものが格助詞「が」をとる。すなわち、

Bガ Cヲ おおう。

という仮定である。

このとき「おおう」は、意志的動作としてではなく、自然現象の結果として、おおわれた「状態」になったことを表わす語であると考えられる。つまり、木が繁った結果、山道をおおい、雪が降った結果、盆地がおおわれるのである。(48)のようにBが抽象的な名詞の場合は、人が集まって熱気が高まった結果、会場が熱気で包まれるという、二段階的な状況になる。以上のことは、次のことと関係があるようである。

「かぶせる」は「かぶる」と対応関係がある。それに対して、「おおう」には対応する語がない。いま、「かぶせる」を「かぶる+（さ）せる」と考えることにする。そうすると、「かぶせる」は着装以前の状態から着装以後の状態への「変化」に主眼がおかれている語と考えられる。すなわち、(44)の例でいえば、本来罪をもたない人に、罪をなすりつけて、罪のある状態へと変化させる行為、それが「かぶせる」である。

他方「おおう」は、動作の主体をとらない構文において自動詞的ニュアンスが強くなって、CがBにおおわれている「状態」に主眼がおかれている語と考えられる。

4. まとめ

構文的には、次のように整理できる。

「おおう」:(i) Aガ Cヲ Bデ おおう。

(ii) (Aガ) Cヲ おおう。

(iii) Bガ Cヲ おおう。

「かぶせる」: Aガ Cニ Bヲ かぶせる。

「おおう」の構文(i)のとき「かぶせる」と類義であり、構文(ii)(iii)のとき「おおう」特有の意味をもつ。

類義である「おおう」の構文(i), および「かぶせる」について分析をまとめると、次の表のようになる。

| | A | | B | | |
|------|----|----|----|-----|------|
| | 有生 | 固体 | 液体 | 抽象的 | 分離可能 |
| おおう | + | + | - | - | ± |
| かぶせる | + | + | + | + | + |

| C | | BとCとの関係 | |
|----|----|---------|-----|
| 有生 | 固体 | 包囲完全性 | 密着性 |
| + | + | + | ± |
| + | + | ± | + |

柴田編1979にも「おおう」「かぶせる」についての分析がある。本稿では、そこでとりあげられていない構文(iii)の例文についても、あわせて分析を行った。

言語経歴：1954年7月、荒川区に生まれ、現在にいたる。

つつむ・くるむ・くるめる

服部 貴 義

1. はじめに

この三語は、国立国語研究所1964では「2. 113包摂」に分類されている。ここではこの三語の分析を試みる。また「くるめる」との関係で「ひっくるめる」にも触れることにする。

2. 分析

従来の分析としては、柴田編1976の「ツツム・クル

ム・マク」、森田1977で「かこむ」の関連語としてあげている「つつむ」の記述などがある。これらを参考にして分析を試みたい。

柴田編1976に、

つまり、ツツムもクルムも、ある物(手段)で、ある(対象)物を〈おおう〉ような場面で用いられるが、……(p. 80)

という記述がある。以下の分析で「おおう」というこ

とばを用いることにする。ただ、注意しなければならないのは、「テーブルの上のどんぶりをふきんでおおう」と「どんぶりを紙でつつむ」「どんぶりをふきんでくるむ」とは状態が異なっていることである。「おおう」は底をかくすことは含んでいないが、「つつむ」「くるむ」の場合は底まで外部と遮断されているということが出来る。詳しくは、「おおう」との比較分析が必要なのであるが、ここでは、ある物を対象に被着させることによって、外部と対象とを遮断するという意味で「おおう」を用いることとする。「おおう」を用いるからといって、その遮断の仕方まで同じではない。

2. 1. 動作主

- (1) 太郎が 本を 紙に つつむ。
- (2) お母さんが 餅に あんを つつむ。
- (3) 魚屋が サンマを 新聞紙で くるむ。
- (4) 彼女が 外套に 身を くるむ。
- (5) 私が 巧言をもって 子供らを くるめる。
- (6) 彼が 皆の意見を ひっくるめる。

こうしてみると四語とも動作主としては人間をとると言えそうである。動物などが動作主になる場合もあるかもしれないが、例文が見つからなかった。ほとんどの場合、人間であると考えてよからう。したがって、以下の例文では、特に必要がない限り、動作主を省略することにする。

2. 2. おおうもの

「ひっくるめる」には、ある対象物がある物でおおうという意味がないので、他の三語について分析する。対象をおおうものは二格かテ格にくる。

- (7) 菓子を 紙に つつむ。
- (8) 菓子を 紙に くるむ。
- (9) 菓子を 紙に くるめる。
- (10) 菓子を 固い紙に つつむ。
- (11) ?菓子を 固い紙に くるむ。
- (12) ?菓子を 固い紙に くるめる。
- (13) ?赤ん坊を 毛布で つつむ。
- (14) 赤ん坊を 毛布で くるむ。
- (15) 赤ん坊を 毛布で くるめる。
- (16) 荷物を ふろしきに つつむ。
- (17) 荷物を ふろしきに くるむ。
- (18) 荷物を ふろしきに くるめる。
- (19) 焼芋を 新聞紙に つつむ。
- (20) 焼芋を 新聞紙に くるむ。
- (21) 焼芋を 新聞紙に くるめる。

- (22) 黒い洋服に 身を つつむ。
- (23) ?黒い洋服に 身を くるむ。
- (24) ?黒い洋服に 身を くるめる。
- (25) マントに 身を つつむ。
- (26) マントに 身を くるむ。
- (27) マントに 身を くるめる。
- (28) ?外套に 身を つつむ。
- (29) 外套に 身を くるむ。
- (30) 外套に 身を くるめる。
- (31) アーモンドを チョコレートで つつむ。
- (32) アーモンドを チョコレートで くるむ。
- (33) ?アーモンドを チョコレートで くるめる。

ニ(テ)格にとる名詞にも微妙な差があると言えそうである。

2. 2. 1. かたさ

(10)はふつうに言えるが、(11)は少々言いにくい。

- (34) 箱を 画用紙で つつむ。
- (35) ?箱を 画用紙で くるむ。

(34)は言えるが、(35)は言いにくい。「くるむ」はおおうものとして固いものをとりにくいと言えそうである。(28)の外套の素材はやわらかいことが多いので「くるむ」が言いやすいのではないか。「つつむ」はおおうものとして固いものもやわらかいものもとり得る。

2. 2. 2. 厚さ

(28)よりも(29)の方が言いやすい。これにはおおうものの厚さも関係していると思われる。外套はわりあい厚い。「くるむ」は厚いものの方が言いやすいのである。「つつむ」は薄いものでもごくふつうにとることができる。(31)(32)を比べてみても(32)の「くるむ」の方が、チョコレートの厚さが厚いようである。ただ厚さの基準ははっきりしているわけではないので、これは二語を区別する絶対的な意義特徴ではない。

2. 2. 3. かたち

おおうものの形は、面状のものと言うことができる。これは、「まく」などと比べればなおいっそうははっきりするであろう。「まく」との比較検討を行っていないので、森田1977の分析を借りることにする。そこでは、「まく」の使い方が分類されている。「ネジを巻く」や「蛇がとぐろを巻く」、「すだれを巻く」などのように対象自体に回転運動や螺旋運動を加える場合は、「つつむ」「くるむ」と関係がないので除外する。問題となるのは、立体状である対象に対して他の物で巻

きつける行為を表わす場合である。これは三つに分けられている。「磁石にコイルを巻く」などのように線状のものを巻きつける場合、「腕に包帯を巻く」などのように面状のものを巻きつける場合、「霧に巻かれる」のように、立体状のものが取り囲む場合の三つである。「つつむ」や「くるむ」は線状のものをとることはない。面状のものをとる。紙でも、毛布でも、ふろしきでも、みな面状のものである。(22)の黒い洋服も、全体的な形は複雑であっても、体と接触するところを考えてみれば、面状であるといえる。

ところで、「つつむ」には次のような例もある。

- (36) 異様な雰囲気 が 会場を つつむ。
- (37) 炎が たちまち 家を つつむ。
- (38) 夜霧が 男の姿を つつむ。
- (39) 出発時の華やかな空気が 船を つつむ。
- (40) 不安な静けさが 町を つつむ。
- (41) 暗闇が 市を つつむ。
- (42) 家々の屋根が 煙に つつまれる。
- (43) なぞに つつまれた島。
- (44) 山の上が 雲に つつまれる。
- (45) 彼の生活が 疑問に つつまれる。

このように、「つつむ」は、「雲」や「霧」などの形のはっきりしないもの、あるいは、「静けさ」や、「雰囲気」などの形のないものをとることができる。そして、この場合、おおうものは、ニ格やテ格ではなくガ格にたつことが多い。ガ格にたつものが直接、対象をおおっているのである。AガBヲCニツツム、という構文ではなく、CガBヲツツム、という形になっているのである。CがAを兼ねている。すなわちおおうものが動作主でもあるという見方もできる。「夕闇が 市を（夕闇で）つつむ」と考えればよい。

なお、「くるむ」にはこの用法はない。

2. 3. おおわれるもの

柴田編1976では、対象物に関して次のように記述している。

「くるむ」……一個の独立した存在体で、それ自身移動させ得るもの。

「つつむ」……この点についての制限はない。

そして、例としては、

- (46) 黒いヴェールで 顔を つつんだ婦人。
- (47) *黒いヴェールで 顔を くるんだ婦人。

などをあげているが、次のような言い方は、ごくふつうにできる。

- (48) 冷えた足を 毛布で くるむ。

ここで、対象物としてどのようなものをとるかをみてる。

「つつむ」の対象物にはなることができ、「くるむ」の対象物にはなることができないものがある。それは、「山頂」、「会場」、「市」、「家」など広い範囲にわたるもの、大きいものである。この場合、おおうものは「霧」や「雲」や「雰囲気」などである。2. 2. 3. でみたように、「くるむ」は、「霧」や「雲」などをおおうものとしてとり得ない。したがって、それらがおおうところの「山頂」や「会場」などを対象物としてとることもできないと言えよう。もっとも、これを言うためには、「くるむ」には、「霧」や「雲」などではない、もっとはっきりした形を持つものを手段として、「山頂」や「会場」など広範囲にわたるもの、大きいものをおおう場合がない、ということが必要である。検討してみた結果、そういう例は見つからなかった。

さて、「つつむ」で言えて「くるむ」で言えない例としては、次のようなものもある。

- (49) 胸に 悲しい思いを つつむ。
- (50) *胸に 悲しい思いを くるむ。
- (51) なんでも つつまず 言うがよい。
- (52) つつみきれない恐れ。
- (53) つつみきれないで 秘密を もらす。
- (54) 真相を つつむ。
- (55) 喜びを つつむ。

これらは、対象として抽象的なものをとっている。また、対象をおおうものもはっきりしない。それに、「かくす」という意味もかなり強い。「くるむ」にはこの用法はない。なお(46)が言えて(47)が言えないのも、ひとつにはこのことが関係しているのではないだろうか。ヴェールは顔をかくすものだから、かくすという意味の含まれる「つつむ」が使えるのであろう。

これら二つの場合の他は、これといった差がみられない。

2. 4. おおい方

2. 4. 1. 外観

柴田編1976では、「つつむ」はおおい方が整っており、「くるむ」は特定の形にならないとしている。たしかにこれは妥当であると思う。

- (56) 箱を ふろしきで つつむ。
- (57) 箱を ふろしきで くるむ。

と言った場合に、(56)の方は、結ぶなどして整っている感じがするが、(57)の方は、結ばずに、ただ巻きつけただけという感じがする。「つつむ」には、ひもで結んだ

り、セロテープでとめたりすることもあるが、「くるむ」の場合は、そういうことはあまりない。

(58) 花を 紙で つつむ。

(59) 花を 紙で くるむ。

を考えた場合も、(58)は贈り物などにするときで、形が整っていると言えるが、(59)は間に合わせに紙でおおったということで形は整っていない。

2. 4. 2. 回転

多くの辞書類の「くるむ」の項には「巻くようにつつむ」とか、「つつんで巻く」という記述がある。これは、「くるむ」に、「まく」の持っている回転という要素が含まれていることを表わしているのではないだろうか。箱をふろしきにくるむときも、赤ん坊を毛布にくるむときも、対象となるものにある物を巻きつけるようにするのである。

(29) 外套に 身を くるむ。

の場合も、袖には注目しておらず、一枚布で体をまくようにしておおっているのである。したがって、袖に手を通さなくても言える。

(26) マントに 身を くるむ。

は袖なしであるから回転という要素がある「くるむ」が使いやすい。

一方の「つつむ」は、回転ということに対してはあまり関係がない。箱をふろしきでつつむ場合、四角い箱であれば、ふろしきの四隅を使っておおい、結ぶなどする。(22)の黒い洋服に身をつつむ、というとき回転は意識されない。

2. 4. 3. 全体と部分

柴田編1976では、「つつむ」は対象物の全体をおおうが、「くるむ」は特に制限はない、としている。たしかに、「つつむ」は全体をおおうと言えそうである。

(60) 花束を 紙で つつむ。

の場合は花の部分をかかしていない場合もあるが、これは、整えるという特徴が働いている例文であるといえよう。

「くるむ」はこの点について制限がないと言ってよいだろうか。(57)の「箱を ふろしきで くるむ」の場合を考えてみよう。今、この箱を直方体あるいは四角柱と考えよう。この(57)の例では、側面である四つの面はおおわれているが、底面にあたる二つの面はかくれていてもよいし、かくれていなくてもよいのである。側面の長い方の一辺がふろしきの一辺より短い場合には、かくれていることが多いであろう。ふろしきの一

辺と同じくらいか、ふろしきの一辺より長い場合は、底面は出ているのである。つまり、全体をおおうかおおわないかという点での制限はない。しかし、ふろしきの一辺より箱の側面の一辺の方がはるかに長かったら、どうであろうか。底面をおおっていないだけではなく、側面も一部分しかおおっていないのである。この場合は、「くるむ」とは言えないのではないか。全体をおおう必要はないが、それでも、多くの部分をおおうという制限はあると思われる。

2. 4. 4. 密着度

「つつむ」のおおうものとおおわれるものは密着している。それに対し、「くるむ」はゆとりがあるという感じがする。そして、このことは、そのおおい方や、全体と部分とも関係してくるのである。「くるむ」の場合、それほど密着しているわけではないので、全体をおおわない場合にも言えるのである。(32)の「アーモンドを チョコレートで くるむ」の場合は、アーモンドとチョコレートが密着していると言える。ただ、この場合は、アーモンドをくるむチョコレートの厚さが、ある程度厚い。このことは、2. 2. 2. のおおうものの厚さで考察したところである。密着度と、おおうものの厚さとは関連がある。密着していないということは、対象とおおうもの間にすき間があるということで、その分だけ外部と対象とは離れることになる。密着していても、おおうものが厚ければ、その厚みの分だけ、外部と対象とは離れる。外部と対象の間に距離をもたせることが共通する。

そうすると、次のように言うことができるのではないだろうか。「つつむ」は整然と対象をおおい、「くるむ」は余裕をもっておおうのである。余裕という中には、おおい方の整っていないこと、全体をおおっていないこともよいこと、密着してなくてもよいこと、ニ(デ)格にくるものが厚みのあるふんわりとしたものが多いことなどを含む。

2. 5. くるめる、ひっくるめる

今までは、「つつむ」と「くるむ」を中心に見てきた。「くるめる」は「くるむ」とほとんどかわらず、「くるむ」の使える場合はだいたい使えそうである。もっとも、「くるむ」の方が使いやすく、「くるめる」はあまり使われない。

ところで、「くるめる」には、「くるむ」にはない用法がある。

(61) 巧言をもって くるめる。

(62) 子供らを くるめて すずめを 助ける。
などで、うまくだますという意味である。「言いくるめる」という一つの動詞として使われることが多い。

「くるめる」の意味の中心的なものはこれであると考
えるのがよいかもしれない。もう一つ、

(63) 何もかも くるめて これだけだ。

(64) 全部 くるめて おいくら？

などのように、ひとまとめにする、一括する、という
意味もある。これは、「ひっくるめる」で置き換えら
れる。「ひっくるめる」にはこの用法しかない。

(65) 皆の意見を ひっくるめて 結論を出す。

(66) 品物は みんな ひっくるめて 百ポンドの値
うちがある。

(67) 自動車賃その他を ひっくるめて 旅費はいかほ
どになりますか。

いう意味で使われる。「くるめる」はそのどちらの意
味にも使え、そのうえ、さらに「うまくだます」とい
う意味で用いられることもある。使用できる範囲が広
いのであるが、あまり使われない。

次に、「つつむ」と「くるむ」について、簡単に整理
しておく。

「つつむ」……おおい方が整然としている。

(全体をおおう。おおう物とおおわれる物が密着し
ている。)

「くるむ」……おおい方にゆとりがある。

(全体をおおわなくてもよい。密着していなくても
よい。)そして、回転という要素を持つ。

以上、考察してきたのだが、包摂を表す動詞として
は、他にも「まく」「かこむ」「かこう」「かぶせる」
「おおう」など多くのものがあり、それらとの比較研
究がなされなければならない。

言語経歴：1957年4月東京都武蔵野市に生ま
れ現在に至る。

3. まとめ

まず四語の用法を整理してみよう。「つつむ」と「く
るむ」は「ある物がある物でおおう」という意味で使
われる。「ひっくるめる」は、「ひとまとめにする」と

はずす・はずれる

木川行央

1. はじめに

(1) 的を そらす。

(2) 的を はずす。

(3) 的を とる。

(1)と(2)を比較すると、いずれも矢等が目標たる「的」
に合致しないという事態をあらわしているという点で
一致する。一方、(2)と(3)は、「的」自体がその接触し
ていた場所から移動させられるという事態をあらわし
ているという点で一致する。すなわち、「はずす」に
は、少くとも二つの意義のあることが予想される。こ
れについては、木川1978において、簡単に述べておい
た。今回は、この「はずす」と自動詞「はずれる」と
いう語を、「そらす」「それる」「とる」などと比較し
ながら、よりくわしくみていく。

2. 「はずす」「はずれる」と「そらす」「それる」

2. 1. 「はずす」「はずれる」と「あてる」「あたる」
「はずす」「はずれる」の反義語は、それぞれ「あて
る」「あたる」だといわれる。木川1978では、「あたる」

の意義を次の(i)(ii)のように考えた。

「あたる」;(i) Aが 目標物たるBに 合致する
ことを示す。

(ii) Aが 固定されたBに 単に接触
する。

(Aは移動して接触するもの、Bは接触をうけるも
のをあらわす。ただし、「接触」という意義特徴の
規定によっては、(ii)における「固定」というBに
関する特徴、「単に」という「接触」の方法に関する
特徴も不必要になる。(木川1979 参照))

これと対応させると「あてる」の意義には次の二つ
が考えられる。

「あてる」;(i) Aを 目標物たるBに 合致させ
ることを示す。

(ii) Aを 固定されたBに 単に接触
させる。

「あたる」「あてる」の(i)にあたる例としては次の
ようなものがある。

(4) 天気予報が あたる。